

令和 6 年 5 月 22 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19H01748

研究課題名(和文)DVのエスカレートを防ぐ：関係性への予防科学的アプローチ

研究課題名(英文)Prevent the escalation of intimate partner violence

研究代表者

相馬 敏彦 (Souma, Toshihiko)

広島大学・人間社会科学研究科(社)東千田・准教授

研究者番号：60412467

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、親密関係での暴力(DV)のエスカレートに関わるハイリスク相互作用の様相を明らかにし予防プログラムの有効性を検証した。主に次の3つの成果を得た。第一は、関係継続という目標を駆動させやすい女性ほど、普段、相手からの理不尽な言動に対して寛容な反応を示すことである。これは、カップル単位での経験サンプリング調査のデータから裏づけられた。第二は、交際中の者が予防プログラムに参加することにより、後の関係への関わり方に対する熟慮状態が促され、関係継続意志の極化が生じることである。第三は、初期の集合的効力感がその後のDV被害を軽減することである。4時点のパネル調査の結果、明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の学術的意義は、第一に、DVのエスカレートしやすい相互作用のあり方を解釈レベル理論に基づき明らかにした点にある。第二には、一次予防プログラムが暴力変化に至る変容過程を示唆した点になる。第三に、集合的効力感からDV被害の予防への因果関係を実証すると同時に、社会的距離が規範的であったCOVID-19感染拡大期間中には、集合的効力感による効果が逆転する可能性を示した点にある。これらの成果は、翻ってDV予防における一次予防プログラムの必要性を示すと同時に、集合的効力感といった社会環境変数のDV予防への影響を示すことで、従来の一次予防プログラムの限界や対応策を示す点で社会的な意義をもつ。

研究成果の概要(英文)：This research project investigated high-risk interactions in intimate relationships that contribute to the escalation of intimate partner violence (IPV) and evaluated the effectiveness of prevention programs. The study revealed three key findings. Firstly, women prioritizing relationship continuity exhibited higher tolerance towards hurtful behaviors from their partners. This finding was supported by data collected through an experience-sampling survey conducted on a couple-by-couple basis. Secondly, participation in prevention programs led to a state of deliberation among relationship partners, polarizing their commitment to the relationship. Lastly, the results of a four-point panel survey demonstrated that initial collective efficacy plays a significant role in reducing subsequent IPV victimization. These findings contribute to understanding high-risk interactions and the potential of prevention programs to address IPV.

研究分野：社会心理学

キーワード：DV 親密な関係 一次予防

1. 研究開始当初の背景

親密な関係における暴力(以下 DV)は公衆衛生上の深刻な問題として、2001年のDV防止法の施行以降、さまざまな対策が講じられてきた。そこでは、被害の早期発見、早期解決を目指す二次予防、ならびに被害者保護や加害者の再教育によって問題の再発を防ぐ三次予防に焦点のあたることが多かった。しかし、二次・三次予防だけでは限界があることから、「未然に防ぐ」一次予防も注目を集めつつある。この一次予防の有効性を高めるためには、DVの生じない関係を構築するための条件を明らかにする必要がある。また、プログラムの効果も多面的に評価される必要がある。

そこで本研究課題では、DVの生じしやすいハイリスク相互作用の様相を明らかにした上で、DVの予防プログラムの効果を検証することを目的とした。

2. 研究の目的

(1) DVのエスカレートしやすい相互作用の特徴として、親密な関係では、その強いコミットメントを背景に、当事者達が関係継続への脅威を緩和しようとするプロセスがある。攻撃のように相手からネガティブな行為を受けたとしても、強くコミットしている当事者は、その悪影響を過小評価したり、その経験を関係評価の悪化に結びつけたりしないようにする「無害幻想」を示すことがあるのである。

本研究では、このような脅威緩和が生じるプロセスには、相手からのネガティブな行為の受け手が、その行為を抽象的に思考することが関与すると予測して検証を行った。

(2) 一次予防プログラムに参加することが、関係性に対してどのような変化を与えるのかを検証する。親密な関係の当事者が、一般的な調査や研究に参加することは、関係性評価やその所属性を見つめ直す機会となる可能性が、先行研究で示されてきた。したがって、DVの一次予防プログラムの受講も、受講者の関係性への見つめ直しをもたらす、プログラム受講前のコミットメントを極化させると予測できる。つまり、プログラム受講前のコミットメントが低いと、受講後のコミットメントはより低下し、受講前のコミットメントが高いと、受講後のコミットメントはより向上すると予測できた。

また、探索的に、受講者の道徳基盤によって、コミットメントの極化がDV規範やDV被加害の変化に与える影響が異なるかどうかについても検討を行った。

(3) 親密な関係の当事者が、自らハイリスク相互作用の危険性に対処するには限界がある。そこで、周囲の人々からの介入可能性として、集合的効力感の機能に着目する。従来の実証データでは、地域の集合的効力感がその地域内の親密関係当事者のDV被害に及ぼす因果関係を十分に検証していなかった。そこで、約7ヶ月間隔の4時点にわたるパネル調査を実施し、因果関係を検証する。また、この調査は、COVID-19の感染拡大対策前後でのデータに基づく。COVID-19の感染対策として、社会的距離(social distancing)の促進政策の影響を受け、集合的効力感のDVへ与える影響にへ変化がみられるかもしれない。この点も合わせて検証する。

3. 研究の方法

(1) 既婚・未婚ペアを対象に、2週間にわたる経験サンプリング調査(以下ESM)を実施し、日々の相互作用において相手から受けた行為とその評価についてのデータを収集した。

具体的には、事前調査を行った後、ESM調査を挟んで、事後調査を行った。ESMでは、1日4回の回答シグナルを送った(合計56回)。シグナルは、最低2時間の間隔を空け、ランダムに発信した。

調査対象者は、カップル双方が回答すること、同棲・同居していることを条件とし、クラウドソーシング・サービスのランサーズを通じて募集した。その結果、54組のカップルが調査参加者となった(男性の平均年齢は 38.1 ± 8.00 歳、女性の平均年齢は 34.2 ± 5.94 歳)

主たる調査項目は次の通りである。(1) 相互作用行為; ESMでは、シグナル受信から過去2時間以内のパートナーとのコミュニケーション(メールやLINEを含む)の有無を尋ね、あった場合にはネガティブ行為(「責め立てた」など7項目)があったかを尋ねた。ネガティブ行為がなかった場合、ポジティブ行為(好意を示したなど7項目)があったかを尋ね、なかった場合には中立的な行為(おしゃべりをしたなど5項目)があったかを尋ねた。その後、それらの行為後の評価として、a 行為の影響(ネガティブ ポジティブ)、b 行為の強さ(弱い 強い)、c 行為直後の気持ち(とても嫌な気持ち とてもいい気持ち)、d 関係満足度(不満 満足)を尋ねた。aとcは、高得点ほどネガティブな影響あるいは嫌な気持ちを意味した。(2) 行為解釈の抽象度; 相馬・伊藤(2017)を用いて、事後調査において、ポジティブな行為とネガティブな行為それぞれ6項目に対する解釈の抽象度を尋ねた。高得点ほど抽象的に解釈することを意味していた

(2) 2つの予防プログラム・プロジェクトのデータセットを用いて検証を進めた。いずれも同一主体が実施しており、目的や構成枠組は同じものであった。受講前の事前調査と事後調査では、関係へのコミットメント「私は今、相手との関係が長く続くことを望んでいる」など7項目、5件法で測定された。他に、暴力の被害「相手が私をこき下ろして侮辱したこと」(被害)「私が相手をこき下ろして侮辱したこと」(加害)など被害各10項目(5件法)、DV規範「交際相手のものを壊したり傷つけることは、よくないと思う」など4項目(5件法)、道徳基盤についても測定し、ケア・危害因子(3項目6件法)の得点を分析に用いた。

(3) インターネット調査会社のモニターに対して、covid-19感染拡大前の2019年9月から約7ヶ月間隔で4回にわたって繰り返し調査を実施した。経時的に同一の交際相手もしくは配偶者との関係が継続していた318名が分析対象となった。各調査では、対象者の知覚した集合的効力感「『近所でもめごとがあったとき』に、地域の人達は、何らかのやり方で介入したり関与したりすると思う」など12項目(5件法)と暴力の被害「私をけなして侮辱したこと」など10項目(5件法)であった。集合的効力感は、2つの下位尺度(社会的統制と信頼・凝集性)に分けて指標化した。

4. 研究成果

(1) ペア内での相互依存性を統制した上で、男女それぞれのインパクト評価の様相を明らかにするため、相手からの行為を受けた後の評価(影響、強さ、感情、関係満足度)それぞれを目的変数に、行為解釈の抽象度とESMにおける相手からの行為内容(1=ネガティブ行為、0=ポジティブもしくはニュートラル行為)を説明変数とするマルチレベルモデル分析を実施した。

その結果、女性では、行為の影響(表1)や行為後の感情、関係満足度に対して、抽象度×ネガティブ行為のクロス水準交互作用が認められた。行為の影響や行為後の感情は、ネガティブ行為を受けた場合に高かったもの、その傾向は行為を抽象的に解釈する女性では緩和されていた(図1)。一方、関係満足度は、ネガティブ行為を受けた場合に低かったが、抽象的に解釈する女性ほど、その影響は緩和されていた。これらの結果は、女性においては予測を支持するものであった。なお、男性においては、解釈の抽象度にかかわらず、ネガティブな行為を受けることが、総じてネガティブに評価されており予測は支持されなかった。

(2) 受講後のコミットメントに対する、プログラム受講(演習もしくは講義)と受講前コミットメントの交互作用効果を重回帰分析によって検証したところ、図2に示されるように、演習の受講はコミットメントを極化させることが示された。また、受講直後のDV規範極化の程度を指標化した上で、それと道徳基盤のケア・危害の得点との、DV規範に対する交互作用効果を重回帰分析によって検証した。その結果、ケア・危害が高い受講者は、コミットメントが極化するほど規範向上していたのに対して、ケア・危害の低い受講者は、コミットメントが極化するほど規範が低下していた。さらに、受講直後のDV加害に対する同様の交互作用効果を検証するための、トービット回帰分析を行ったところ、ケア・危害が高い受講者は、コミットメントが極化するほど加害が低下していた。これらの結果は、深く内容に関与する演習形式の予防プログラムの受講は、交際者の関係に対する「見つめ直し」の機会を提供しうることを示した。そして、ケア・危害に対する道徳基盤を伴う「見つめ直し」が、相互作用行為を道徳化させ、DV規範の向上、加害の抑制につながる可能性を示した。

(3) 調査初期時点のデータはcovid-19感染拡大前の状況を反映し、2時点目以降のデータがcovid-19感染拡大以降の状況を反映していた。集合的効力感のいずれかの下位因子とDV被害の初期時点の各得点を切片として、それが、それぞれのその後の変化(傾き)に影響するかどうかを、パラレル成長モデル分析によって検証した。そこでは、各指標の変化同士の関連についても検討した。その結果、初期の集合的効力感がその後のDV被害を抑制することを示した。また、集合的効力感とDV被害それぞれの変化間には正の関連が示された。後者の結果は、covid-19感染拡大への対策として、社会的距離が促進された期間では、集合的効力感の高さが関係外の他者との接触可能性を低減させ、DV被害のエスカレートリスクを高めた可能性を示すものであった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 11件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Souma Toshihiko, Komura Kentaro, Arai Takashi, Shimada Takahito, Kanemasa Yuji	4. 巻 19
2. 論文標題 Changes in Collective Efficacy's Preventive Effect on Intimate Partner Violence during the COVID-19 Pandemic	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6. 最初と最後の頁 12849 ~ 12849
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/ijerph191912849	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Liang Tingchang, Lin Zhao, Souma Toshihiko	4. 巻 12
2. 論文標題 How Group Perception Affects What People Share and How People Feel: The Role of Entitativity and Epistemic Trust in the "Saying-Is-Believing" Effect	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 728864
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2021.728864	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Hashimoto Takaaki, Karasawa Kaori	4. 巻 25
2. 論文標題 Are the powerful retributive, forgiving, or both? The moderating role of power on people's responses to norm violation	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Asian Journal of Social Psychology	6. 最初と最後の頁 391 ~ 405
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ajsp.12501	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Tham Yukari Jessica, Hashimoto Takaaki, Karasawa Kaori	4. 巻 185
2. 論文標題 Who incurs a cost for their group and when? The effects of dispositional and situational factors regarding equality in the volunteer's dilemma	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Personality and Individual Differences	6. 最初と最後の頁 111236 ~ 111236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.paid.2021.111236	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相馬敏彦	4. 巻 63
2. 論文標題 助け合いの「陥穽」研究の展開に向けて - 上田論文へのコメント -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 304-307
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古村健太郎, 戸田弘二	4. 巻 63
2. 論文標題 助け合いとしてのアタッチメント	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 263 - 280
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tham Yukari Jessica, Hashimoto Takaaki, Karasawa Kaori	4. 巻 Early View
2. 論文標題 Social rewards in the volunteer 's dilemma in everyday life	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Asian Journal of Social Psychology	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ajsp.12472	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水 佑輔, 橋本 剛明, 唐沢 かおり	4. 巻 28
2. 論文標題 ギャンブル障害というラベリングがもたらす否定的態度への効果	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 認知科学	6. 最初と最後の頁 161 ~ 167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11225/cs.2020.063	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大上麻海・相馬敏彦	4. 巻 65
2. 論文標題 他者志向性を伴う政治的行動が 資源動員に与える影響に関する研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福岡大学商学論叢	6. 最初と最後の頁 461-480
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金政祐司, 古村健太郎, 浅野良輔, 荒井崇史	4. 巻 92 (3)
2. 論文標題 愛着不安は親密な関係内の暴力の先行要因となり得るのか? 恋愛関係と夫婦関係の縦断調査から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 157 - 166
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.92.20013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水佑輔・ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり	4. 巻 92(6)
2. 論文標題 象徴的障害者偏見尺度日本語版 (SAS-J) の作成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 532-542
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.92.20208	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり	4. 巻 37(1)
2. 論文標題 多様な精神障害に対する人々の認知: ステレオタイプ内容モデルに着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 36-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14966/jssp.2012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計34件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 Souma Toshihiko, Komura Kentaro, Arai Takashi, Shimada Takahito & Kanemasa Yuji
2. 発表標題 Has Collective Efficacy Prevented Intimate Partner Violence during COVID-19?
3. 学会等名 2023 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 橋本剛明
2. 発表標題 「か弱くない被害者」に人々は共感するか 行為性の知覚による影響の検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 橋本剛明・唐沢かおり
2. 発表標題 「経験性」の心的機能の知覚と道徳的保護 感情価にもとづく経験性の細分化による検討
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 島田貴仁・高木大資・古村健太郎・讃井 知・浦 光博・中谷友樹
2. 発表標題 地域での犯罪予防 研究者と実務家の協働に基づく新たな地域介入の可能性
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 久保田愛子・三和秀平・古村健太郎・徳岡 大・伊藤君男
2. 発表標題 大学での心理教育における新たな潮流
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会オンラインシンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 相馬敏彦・古村 健太郎・金政 祐司・謝 新宇
2. 発表標題 親密な相手からのひどい仕打ちを無害化するとき-ペアを対象とする経験サンプリング調査による検証-
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古村健太郎・相馬敏彦・金政 祐司・謝 新宇
2. 発表標題 コミットメントがもたらすパートナーの行為への評価バイアス 経験サンプリング法を用いた日常的相互作用についての検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 相馬敏彦
2. 発表標題 コロナ下において親密な関係はどのように変化したのか？-パラレル潜在成長モデル分析による検討-
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第31回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Souma Toshihiko, Komura Kentaro, Sugiyama Syouji & Yamanaka Tamiko
2. 発表標題 How participating in a program on intimate partner violence moderates prior victimization's impact on assessments of the relationship?
3. 学会等名 2021 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古村健太郎・相馬敏彦・荒井崇史・金政祐司・島田貴仁
2. 発表標題 ストーキング被害パターンと交際中のIPV被害の関連
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第67回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 相馬敏彦・古村健太郎・荒井崇史・金政祐司・島田貴仁
2. 発表標題 暴力を振るう相手からの離脱はどのようにして決まるか？ 関係離脱意思の段階変化に及ぼす影響因の違い
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第67回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 喜入暁・増井啓太・下司忠大・古村健太郎
2. 発表標題 Dark Triad/Tetrad と問題行動を再考する 社会的関係性の視点から
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hashimoto, T., & Karasawa, K.
2. 発表標題 Power and apology affects aggression toward a norm-violator: Analysis using the voodoo doll paradigm.
3. 学会等名 Paper presentation at the 14th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Toshihiko Souma, Kentaro Komura, Syouji Sugiyama, Tamiko Yamanaka
2. 発表標題 How participating in a program on intimate partner violence moderates prior victimization's impact on assessments of the relationship?
3. 学会等名 The Society for Personality and Social Psychology's Annual Convention 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 相馬敏彦
2. 発表標題 SD参加者をどう理解すべきか (「Speed Datingを用いた『出会い』研究の展開」指定討論)
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 相馬敏彦・古村健太郎・杉山詔二・山中多民子
2. 発表標題 DVの予防プログラムはどのように関係性に影響するのか；交際中の受講者に対するパネルデータを用いた効果検証
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ryosuke Asano, Yuji Kanemasa, Kentaro Komura
2. 発表標題 Having a happy spouse is related to greater happiness.
3. 学会等名 The Society for Personality and Social Psychology 's Annual Convention 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浅野良輔, 古村健太郎, 金政祐司
2. 発表標題 あなたが幸せなら私も幸せ 夫婦関係における主観的幸福感の相互影響
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金政祐司, 古村健太郎, 浅野良輔, 荒井崇史
2. 発表標題 愛着不安はDaVやDVの先行要因となり得るのか? 2つの親密な関係の縦断調査による検討
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金子迪大, 中川威, 古村健太郎, 高橋英之, 島井哲志
2. 発表標題 ダイナミックなポジティブ心理学
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり
2. 発表標題 日常的なボランティアのジレンマ状況における対人認知
3. 学会等名 日本社会心理学学会第61回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Shimizu, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K.
2. 発表標題 How do people view various mental illnesses? A preliminary analysis to classify the stereotype of illnesses into four categories using the Stereotype Content Model.
3. 学会等名 The 59th Annual Conference of Taiwanese Psychological Association (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり
2. 発表標題 ギャンブル障害者への否定的態度の軽減を目指して：ラベリングがもたらす影響の包括的検討
3. 学会等名 日本健康心理学会第33回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹部成崇・橋本剛明
2. 発表標題 他者の善行を目撃したときに心を動かされやすいのはどのような人か？ - 勢力感の個人差とモラル・エレベーションの関連の検討 -
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 相馬敏彦
2. 発表標題 covid-19 は親密な関係をどう変えたか？ パンデミック前後での複数のパネルデータから見えてくるもの
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第67 回大会(オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川西 健二・相馬敏彦
2. 発表標題 行政改革による運営主体の変化は，国立大学職員の帰属意識に何をもたらしたか
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第67回大会(オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀田 彩・相馬敏彦・ 原口恭彦
2. 発表標題 オールラインの強さとパフォーマンスの関係における多様性風土の調整効果の検討
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第67回大会(オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西村太志・稲見汐音 ・相馬敏彦・ 鬼頭美江 ・山田順子・谷口淳一・金政祐司・宮川裕基
2. 発表標題 スピードデーティングにおける「自発的接近行動」とマッチングしたペアの特徴に関する報告
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第67回大会(オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀田 彩・相馬敏彦・ 原口恭彦
2. 発表標題 上司サポートの分化と離転職意思の関係におけるサーバント・リーダーシップの調整効果の検討
3. 学会等名 産業・組織心理学会第36回大会(オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 相馬敏彦・堀田 彩・白井志津子・原口恭彦
2. 発表標題 多くの部下を抱える上司の「分け隔て」が部下に受け入れられるための信念の力；LMX分化から組織サポートや離転職意思への影響を調整する上司の分配基準の効果
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会(オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古村健太郎，金政祐司，浅野良輔
2. 発表標題 COVID-19パンデミックがもたらす夫婦関係の再評価
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会(ウェブ開催)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古村健太郎
2. 発表標題 接近コミットメントが心理的暴力を気づきにくくする
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本剛明
2. 発表標題 「社会生活におけるPositivityのネガティブサイド」 話題提供.
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会公募シンポジウム(ウェブ開催)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hashimoto, T., & Karasawa, K.
2. 発表標題 Justice beliefs, intervention, and apology affect people's attitudes toward target of injustice.
3. 学会等名 Paper presentation at the 32nd International Congress of Psychology (ICP2020+), Prague, online. (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 松井 豊、相羽 美幸、古村 健太郎、仲嶺 真、渡邊 寛	4. 発行年 2023年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 238
3. 書名 恋の悩みの科学	

1. 著者名 笹山 郁生、真島理恵、相馬敏彦、黒川光流、木村堅一、谷口弘一、吉山尚裕、縄田健悟、黒川雅幸、竹中一平、植村善太郎、木戸彩恵、八ツ塚一郎	4. 発行年 2023年
2. 出版社 サイエンス社	5. 総ページ数 320
3. 書名 集団と社会の心理学	

1. 著者名 岡本 真一郎、木村昌紀、山下玲子、菅さやか、今井芳昭、相馬敏彦、太幡直也、竹中一平、花尾由香里、中尾元、内田由紀子、北村智	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 コミュニケーションの社会心理学	

1. 著者名 綿村 英一郎、藤田 政博、板山 昂、赤嶺 亜紀、入山 茂、今村 洋子、増井 啓太、澤田 尚宏、相馬 敏彦、越智 啓太、石井 隆、大山 朗宏、上宮 愛、福島 由衣、神垣 一規、白岩 祐子、中園 江里人	4. 発行年 2022年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 318
3. 書名 入門 司法・犯罪心理学	

1. 著者名 松井 豊、宮本 聡介	4. 発行年 2020年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 新しい社会心理学のエッセンス	

1. 著者名 唐沢 かおり	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 250
3. 書名 社会的認知	

1. 著者名 林 雄亮、石川 由香里、加藤 秀一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 若者の性の現在地	

1. 著者名 ケノン・M・シェルドン、トッド・B・カシュダン、マイケル・F・スティーガー、堀毛 一也、金子 迪大	4. 発行年 2021年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 608
3. 書名 ポジティブ心理学研究の転換点	

1. 著者名 日本キャリア・カウンセリング学会、廣川 進、下村 英雄、杉山 崇、小玉 一樹、松尾 智晶、古田 克利	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 420
3. 書名 キャリア・カウンセリング エッセンシャルズ400	

〔産業財産権〕

〔その他〕

相馬敏彦 ウェブサイト https://home.hiroshima-u.ac.jp/souman/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	古村 健太郎 (Komura Kentaro) (40781662)	弘前大学・人文社会科学部・准教授 (11101)	
研究分担者	橋本 剛明 (Hashimoto Takeaki) (80772102)	東洋大学・社会学部・准教授 (32663)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関